

情報の主体価値と従属価値のシステム —文化・文明の関係と変化の構造—

山 辺 孝*

The System of Subjective Value and Subordinate Value in Information

Takashi YAMABE

1. 情報の主体価値と従属価値の関係 —日本の文化・文明のあり方と構造—

一般に情報価値は固定価値と流動価値の二つの側面をもち、固定価値は一定の位置や状態にあって変化しない価値であるのに対し、流動価値は常に移り変わるというように変化する価値である。例えば、日本の首都は明治以降、東京に置かれ、124年間変化しないので、情報価値としては長い間、固定価値を保ってきたといえるが、今後、遷都が決定して、ある地方都市に移れば、そこが次の首都となり、情報価値としては固定価値から流動価値へ移行することになる。

また物事を決定し、行動する主体側からみると、情報の基本価値は主体価値ないし固有価値と従属価値ないし付随価値の二つに分かれ、情報の基本価値としては、その構成のウエイトからみれば、主体価値ないし固有価値が従属価値ないし付随価値よりも大きな役割を果たす。これは情報の基本価値のなかで、主体価値は変化しない固定価値の性格から常にイニシアチブを取って行為や作用を他に及ぼすのに対し、従属

価値は変化する流動価値の性格から主体価値の行為や作用の影響を受け、それにつき従うからである。このため、情報の基本価値は主体価値と従属価値における支配・従属の関係や作用を通じて形成されることになる。

また情報の基本価値は、主体価値が従属価値に働きかけ、影響を与える、あるいは従属価値が主体価値の働きや影響を受けることによって、その器を大きくし、価値の向上をはかることができる。これは弁証法でいえば、正 $\leftrightarrow$ 反=合の世界をつくることを意味する。これを情報価値からみれば、正は主体価値であるのに対し、反は従属価値であり、合は基本価値である。物事や環境が落ち着いている正常なときには、情報の基本価値において主体価値が常にリード役となって従属価値を受け入れ、それに作用や影響を及ぼしながら、全体の基本価値の向上をはかることができる。しかし、物事や環境の変化に伴って、情報の基本価値のうち従属価値がしだいにウエイトを高くしたり、あるいは物事や環境の激変によって従属価値がいきなりウエイトを高くすれば、情報の基本価値としては主体価値に改革が迫られ、従属価値が大きな役割を果たし、基本価値もまた変化する。この場合、情報の基本価値において逆に従属価値がイニシアチブを取って主体価値に働きかけ、影響を与えるというように、主体価値と従属価値の支

* 経営情報学科—企業経済学，産業組織論

Department of Business Administration and Information Science — Business Economics, The Theory of Industrial Organization

配・従属関係が逆転し、基本価値そのものが大きく変化する。このように、物事や環境が変化し、または激変する異常なときには、情報の基本価値において逆に従属価値がリード役となって主体価値を受け入れ、それに作用や影響を及ぼしながら、全体の基本価値の変革をもたらすことになる。

いまや、日本で文化と文明のあり方や共存が問われているが、これら二つを情報の基本価値から取り上げてみると、主体価値の領域に属するものは自分で耕してつくり上げてきた文化であるのに対し、従属価値の領域に属するものは市民的に生成、発展してきた文明である。すなわち、主体価値としての文化は人間のココロに関する領域であり、国民の精神や思想の固定価値を代表するものである。一方、従属価値としての文明は人間のモノやカネに関する領域であり、もっぱら技術、経済及び社会を中心に発展していく流動価値を代表するものである。

文化は人間が自然に働きかけて生活の充実や発展をはかるための精神的活動の所産で、とくに宗教、道徳、学問、芸術などをいうのに対し、文明は人間の知識が開け、社会が進み、生活が便利に豊かになるための技術的、物質的活動の所産である。このため、文化と文明は対比概念としてとらえられ、文化は口誦的、信仰的、非合理的人間関係から発足しているのに対し、文明は数学的、機能的、合理的人間関係から成立している。これについて、司馬遼太郎は、下記のように判り易く述べている。

「文明は“だれもが参加できる普遍的なもの、合理的なもの、機能的なもの”をさすのに対し、文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団（例えば民族）においてのみ通用する特殊なもので、他に及ぼしがたい。つまり普遍的ではない。例えば青信号で人や車は進み、赤で停止する。このとりきめは世界に及ぼしうるし、げんに及んでもいる。普遍的という意味で交通信号は文明である。逆に文化とは、日本でいうと、婦人がふすまをあけるとき、両ひざをつき、両手であけるようなものである。立ってあけても

いいという合理主義はここでは成立しない。不合理をこそ文化の発光物質なのである。同時に文化であるがために美しく感じられ、その美しさが来客に秩序についての安堵感をあたえ、自分自身にも、魚巢にすむ魚のように安堵感をもたらす。ただし、スリランカの住宅にもちこむわけにはいかない。だからこそ文化であるといえる。」⁽¹⁾

したがって、文化は言語、習慣、信仰、思想、芸術、教育などで、特殊性、感受性、不合理性を指向し、そのため伝統性、気質性、安定性を追求されるのに対し、文明は秩序、技術、物質、取引、輸送、通信などで普遍性、機能性、合理性を指向し、そのため革新性、普及性、変化性が追求される。また一般に文化は特殊性を指向することから民族や言語や伝統と結びついてある地域にとどまり、国境を越えていくことがないのに対し、文明は普遍性を指向することから都市を拠点に民族や国家を越えて普及していくことになる。

これを日本についてみれば、日本人の言語、習慣、信仰、思想、芸術、教育など文化領域に属するものは長い歴史をもち、そのあり方は独自のものである。例えば、道祖神などは日本人の石に対する信仰の現れで、その創造物は日本人のココロを代表し、永遠に消え去ることはない。また諺や故事来歴をみると、日本人の物事についての考え方が滲み出ており、それらは現代でもそのまま当てはまり、役に立つものが多い。さらに文学としての俳句や和歌は日本人が創り出したもので、その十七文字や三十一文字で表した表現やココロを外国人が理解することは難しい。そのほか、日本の神社、仏閣、城、民家、庭園などは日本人が世界に誇る文化財である。

一方、科学、技術、物質、取引、輸送、通信など文明領域に属するものは外国から導入し、日本人なりに咀嚼して発展させてきた。例えば、モノをつくる世界では外国人が開発した

(1)司馬遼太郎「アメリカ素描」, 読売新聞社, 昭和61年。

ものを日本人なりの創意や工夫をこらして安く
て良い製品をつくり上げ、それを国内のみならず
外国へ輸出して、「メイド・イン・ジャパン
のモノは素晴らしい」と外国人から高い評価を
受けている。この点、日本で「昔の外来文化は
知識階級や上層階級だけが享受したもので、庶
民はつねに変わることなく、民族固有の文化や
思想をもってきた。この土台があったればこそ、
日本は安定した社会と文化を保持することがで
きたのである。固有文化の泥臭さが日本の本質
なのである。その価値が外来文化の摂取に発揮
されることは、今日見る通りである。」⁽²⁾と述
べているように、日本人の固有文化の保持が外
来文化、とくに外国文明の受け入れに大きく役
立ったとみることができよう。

それでは日本の文化を外国人はどのようにと
らえ、評価してきたのであろうか。これを明治
時代を中心に訪れた外国人の見聞録から取り上
げてみよう。

アーネスト・サトウは「一外交官の見た明治
維新」で、「江戸には立派な公共建築物こそない
が、町は海岸に臨み、それに沿って諸大名の
遊園地が幾つもあった。城は素晴らしく大きな
濠をめぐらして、巨大な石を積み重ねた堂々た
る城壁を構えていた。絵のように美しい松並木
が日陰をつくっており、市の中にも田舎びた所
が多く、すべてが偉大という印象を与えていた。」⁽³⁾
と述べているように、江戸の自然と城が
一体化した文化の偉容を指摘している。また
エミール・E・ギメは「東京日光散策」で、
「初めから日本人は、自分たちを取り巻いてい
る自然に驚嘆していた。日本人は慈悲深い大地
と魚がたくさんいる海を崇拝した。神々が彼ら
を幸福にしてくれるのだと心底から考えた。
……日本人は黙想し、手を合わせ、頭を下げて
礼拝したのだ。誰を、何をだって?…すべてを

だ!」⁽⁴⁾と述べているように、こうした自然と
の関わりが芸術に調和や無駄のなさをもたら
し、芸術や宗教の意図がこめられてつくられた
建物も、自然のなかに、樹々の間に抱かれたと
き崇高な美しさを発揮すると考えた。⁽⁵⁾

日本学の研究に専念したラフカディオ・ハー
ンの「知られぬ日本の面影」を読むと、ハー
ンはキリスト教文明の優位性に囚われることな
く、日本の文化をキメ細かく観察し、道端の石
地蔵に優しい無心の微笑を見出して愛着を感じ、
さらにその表情は日本人の心性にしみわた
った仏教的感化の結果、悲しみのときに自己
を殺す日本民族独特の微笑を刻み込んだものだ
と述べている⁽⁶⁾ことは、日本人以上に、その文
化の実相を奥底からえぐった鋭い観察眼であ
る。次いでハーンが「日本の上層知識階級の知
識人はほんのここ二、三十年の間に不可知論者
になった。彼らは理屈なしに自分の国の古い信
仰は恥ずべきものだと思いこんでいる。民間信
仰などは論外というところだ。だが、日本人の
生活の稀な美しさは、そうした西洋かぶれの上
層民にはなく、一般大衆一常民の中にこそあ
るのだ。彼らの生活は、われわれのうぬばれて
いる西洋文明の進路が果たして正道かと疑わせる
ほどのものだ。日本の常民の持つ迷信が、ど
れほど日本人の生活の美しさを増していることか
云々。」⁽⁷⁾と述べていることは、彼が常民の生活、
常民の思想に惹かれて、そこに真の日本精神を
見出そうとするココロの迸りを示すものであ
る。⁽⁸⁾

またルートヴィヒ・リースは「日本雑記」で、

(4)エミール・E・ギメ「東京日光散策」(Promenades Japonaises Tokio-Nikko Japan), 1880年刊, 佐藤宗子(翻訳評者), 佐賀, 芳賀編, 前掲書。

(5)エミール・E・ギメ 前掲稿。

(6)ラフカディオ・ハーン「知られぬ日本の面影」(Glimpses of Unfamiliar Japan), 1894年刊, 牧野陽子(翻訳評者), 佐賀, 芳賀編, 前掲書。

(7)高木大幹「小泉八雲, その日本学」, リプロポート, 1986年。

(8)高木, 前掲書。

(2)五来 重「石の仏教」, 角川選書, 昭和63年。

(3)アーネスト・サトウ「一外交官の見た明治維新」(A Diplomat in Japan) 1921年刊, 大沢吉博(翻訳評者), 佐賀彰一, 芳賀 徹編「外国人による日本論の名著」, 中公新書, 昭和62年。

「すでに三百年以前、オランダ人はこんな経験をした。外人が日本の商人の誰か一人と争うと、日本の商人仲間は全く自発的に一致団結してボイコットに立ちあがる。ひとたび大和魂が喚起されると、日本人はもう暗黙の義務観からのがれることが出来なくなってしまうのである。」⁽⁹⁾と述べているように、日本人が外人と争うときには結束して事に当たるという気質を取り上げている。一方、リースは自分の体験談を書くだけでなく、火事に対する国民性の違いを比較して論じている。「ロンドンでは見物人が山のように押し寄せて大騒ぎになる。シカゴでは損害は何百万ドルになったという噂話があつという間に広がる。…東京では事が行儀よく丁寧に行われる。そして周りの人は最善を尽くして手伝いをする。」⁽¹⁰⁾と論じていることは、日本人がいざというときには冷静沈着に助け合って事に当たるという気質を評価していることを示すものである。さらにエルヴィン・ベルツの日記を読むと、日本人に対する評価は様々であるが、ベルツは火事場で見知らぬ人間どうしが助け合い、火事がしずまってからてきぱきと復旧につとめる日本人の様子を「驚嘆すべき国民」と讃え、また隅田川で船遊びに興ずる多くの人々が全く整然と行動していることに驚き、「行儀の良さが骨の髄までしみこんでいる国民だ」と記している⁽¹¹⁾。火事場の件はリースと同じ所見だが、日本人がきわめて行儀正しい国民であると評価していることは、その他の外国人の所見にも数多くみられる。

大森貝塚の発見者であり、また日本の伝統的民具を数多く収集した、モース・コレクションで有名なエドワード・S・モースは「日本その日その日」で、「小憩するために（日光へ行く

途中…筆者註）車を止めた茶屋で、我々はいたる所を見廻した。部屋は奇麗に取り片づけられている。畳は清潔である。杉材の天井やすべての木部は穴を埋めず、油を塗らず、ニスを塗らず、ペンキを塗ってない。家の一面は全部開いて、太陽と空気とを入れるが、而も夜は木造の二り戸で、また必要があれば、昼間は白い紙を張った軽い枠づくりの衝立で、きっちりと閉め切ることが出来る。室内の僅かな装飾品は花瓶とかけ物である。かけ物は絵の代わりに、訓言や古典から取った道徳的な文句を、有名な人が仏教の僧侶かが書いたものであることがある。……鼠無地の壁を丸くくりぬいた、直径四フィートの窓であつて、外側には松の立木をわざわざ曲げくねらせ、また石燈籠が見える。若しこの丸い眺望の中に山の峯を取り入れることが出来れば、それは理想的なものとされる。このような窓は瓢箪を二つ連ねた形であつたり、四角であつたりすることもあるが、形の如何を問わず、常によい趣味で出来ている。我々はこのように、物珍しくも古めかしく、且つ美しい趣を見て、殆ど有頂天になった—我国の家屋にあつては決して見られぬ、然し取り入れてもよい趣味である。」⁽¹²⁾と述べている。

またモースは同著作のなかで数多くの日本とアメリカの比較を行っているが、ほとんどの場合、モースが軍配をあげているのは日本のほうである。人力車夫の礼儀正しさ、日本人の動物に対するやさしさ、日本の赤ん坊の機嫌のよさ、日本人の外国人に対する寛容さ、日本の安全さ、日本人の生活のいろいろなところに現れている美的センスや自然への愛、等々、モースが日本で何か感心するものを見ると、ほとんどの場合、それは祖国アメリカがいかに日本に及ばないかという感想を彼の胸中に生み出していった。⁽¹³⁾

さらにモース・コレクションをみると、モースの集めたものにはまだ十分江戸の香りが残っ

(9) ルートヴィヒ・リース「日本雑記」(Allerlei aus Japan), 1905年刊, 中 直一(翻訳評者), 佐賀, 芳賀編, 前掲書。

(10) ルートヴィヒ・リース 前掲稿。

(11) エルヴィン・ベルツ「日記」, 1876-1905年 (Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan), 中 直一(翻訳評者), 佐賀, 芳賀編, 前掲書。

(12) エドワード・S・モース, 西川欣一訳「日本その日その日Ⅰ」, 東洋文庫, 1970年。

(13) エドワード・S・モース「日本その日その日」(Japan Day by Day), 1917年刊, 太田雄三(翻訳評者), 佐賀, 芳賀編, 前掲書。

ており、いまだ開化の波は人々の生活までには及んでいなかった。しかし、モースの集めたものをみる限り、そこには堅実な生活があったことがうかがえる。どれも丹精こめてつくり出されており、丹念に使いこまれている。おしゃれなものもあれば、笑いをさそうユーモラスなものもある。すくなくとも貧しさを感じさせることはない。むしろ、私たちは、そこに安定した生活文化をみることができる。それは、それなりの豊かさといってもいい。⁽¹⁴⁾

モースは当時日本で首都東京を中心にすさまじい勢いで進行中だった西洋文化摂取の動きに目を留め、外国の長所から学ぶのにためらわない日本人の国民性に感心したが、しかし、モースが第一に興味を抱いたのは、まだ西洋からの影響によってそれほど変化しないでいる日本の伝統的文化の姿だった。そして、モースは日本人の西洋文明摂取を、日本には文明と呼べるほどの文明がそれまでなかった証拠というようには取らなかった。日本到着早々に日光へ旅行したり、江の島に滞在したりして、まだ西洋化の波にほとんど洗われていない地方を視察し、日本の伝統的文化の高さをみて取る機会のあったモースは、逆に日本の迅速な西洋文明摂取も高度な固有の文化があって初めて可能だったと思ったのである。日本人にはなんでも教えることができる積もりでやってきた西洋人が、日本にきて虚心に日本人と日本文化を観察してみれば、多くの点で学ぶべきは西洋人のほうだと気づくのではないかとモースは思った。⁽¹⁵⁾

これは、日本の国民思想形成において主体価値としてのココロや思想などの文化が従属価値としてのモノや技術などの文明を受け入れ、国民全体の基本価値の器を大きくし、その価値を高めてきたことを意味する。もともと、日本列島は海に囲まれた島国であるので、海上ルート

によって内なるヒトとモノ、外なるヒトとモノの交わりのなかで、重層しあるいは習合しながら、日本列島の文化をみのらせてきた。……実際に古代の日本文化はアジアの文化と密接に連動して、そのなかみを豊かにしてきた。旧石器の文化や縄文文化にあっても、決して閉鎖的に孤島の文化としてなりたったのではない。とりわけ弥生文化、古墳文化、飛鳥文化など、弥生時代以降の文化においては、渡来の文化の様相は一層際立ってくる。⁽¹⁶⁾これは、渡来のヒト、モノを含めた文化が従属価値であるとすれば、日本のヒト・モノを含めた主体価値の文化がそれを受け入れ、全体としての国民価値を向上させてきたことを意味する。

これを宗教の例で示せば、日本人の宗教は主体価値としての民族系の神道に従属価値としての外来の仏教信仰が重なり、それに同じ外来の道教や儒教の要素が加わって複雑に形成された。しかし、日本人の基本価値としての中核は神道と仏教の習合関係にあり、一般には神仏信仰として発展した。そこに日本人のカミ、ホトケに対する信心というようにココロを中心とした国民意識における高次元の世界の創造を見出すことができる。

次いで、幕末から明治初期にかけて西欧各国へ派遣された日本人が西洋の文明をどのようにとらえ、評価していたのであろうか。先ず鎖国時代の状況から取り上げてみよう。

鎖国時代は長崎出島でオランダとの国交が維持され、その後、漂流者の中山（ジョン）万次郎、浜田産蔵が日本に帰り、この二人が幕府に対しアメリカ、東南アジアの海外情報を提供した。一方、密航者として、坂本竜馬、高杉晋作の二人が上海を、伊藤博文、井上馨ら四人が欧州をそれぞれ訪問し、海外情報を取得した。明治新政府の正式渡航No. 1として清水卯三郎が慶応三年、パリー万国博覧会へ派遣され、銭屋五兵衛（回船業）、高田屋嘉兵衛（回船業）がそれぞれロシア密貿易、エトロフ島開発などで

(14)守屋 毅稿「モース・コレクション」、国立民族学博物館編「モース・コレクション」、千里文化財団、1990年。

(15)エドワード・S・モース、太田雄三（訳評）、佐賀、芳賀編、前掲稿。

(16)上田正昭稿「渡来のひとと渡来の文化」、毎日新聞、1991年4月2日。

活躍した。

幕末の黒船渡来で鎖国の夢を破られ、開国に踏み切った幕府は万延元年、日米通商条約批准のため新見豊前守を首班に米軍艦ポーハタン号（12,415トン）で総勢76人にのぼり、別に大統領謁見のさいの諸道具運搬施設の護衛航で勝海舟、福沢諭吉らが乗った幕府軍艦咸臨丸（300トン）と共にわが国初の外交使節団を海外に派遣した。次いで、文久二年遣欧使節として竹内下野守を首班に総勢36人が欧州へ派遣され、フランス、イギリス、オランダ、プロイセン、ロシア、ポルトガルを訪れ、一年間かかって帰国した。幕府はこれらを含めて六回に及ぶ海外使節団を派遣している。

万延元年遣米使節団はハワイ、サンフランシスコ、パナマ海峡を横断し、ワシントン、ニューヨークなど米国各地を訪れ、帰路はアフリカ喜望峰を回り、印度洋に出てバタビア、香港に寄り、十ヵ月間の世界一周旅行をした。彼らは外国の文明開化、電信、郵便、汽車、汽船、気球、写真、教会、議事堂などあらゆるものを実際の目で眺め、スケッチなどを交えて、詳細に記録した。そして、米国の政治、経済、外交、宗教、風俗などを描いて西欧民主主義の実態を紹介した。その記録¹⁷⁾をみると、下記のような注目すべき描写がある。

所見

- ① アメリカ人が朝野を挙げて使節団を歓迎した。
- ② 日本人を初めて見て、彼らは日本人が礼儀正しいのに驚いた。
- ③ アメリカ人は日本人を見習うべきである意見も書かれた。
- ④ 日本人は文明開化を目の当たりにみて驚異の連続であった。
- ⑤ もちろん、日本人はアメリカ人に違和感をもったが、民主主義のメリットを認めた。
- ⑥ しかし、同時に日本人としての自覚を

（17）東大史料編さん所編「万延元年遣米使節団史料集（七巻）。

捨てず、日本の良さを改めて見直した。

コメント

- ① 使節団はアメリカの文明的発展に驚いたが、日本の閉鎖的民族意識から脱するには一定の距離を置いていた。
- ② だが、日本は奈良、平安時代から中国、朝鮮と仏教、芸術、財貨などの交流を行い、中国に遣唐使を派遣するなど開放的ビヘイビアを打ち出している。その使命は日本からいえば文化の摂取であり、交易の利を求めることであったが、中国からいえば朝貢にほかならなかった。またこれは同質の東洋世界のなかの交流であり、異質の西洋世界との交流ではなかった。

- ③ 日本がようやくアメリカとの通商に踏み切ったとはいえ、封建体制を維持する姿勢には変わりがなかった。

明治四年、明治新政府は岩倉具視を大使、大久保利通、木戸孝允を副使とし、若手のエリート官僚、数十人をしたがえ、総勢108人の大視察団を欧米に派遣した。視察団は一年十ヵ月にわたって欧米十二ヵ国を回覧し、脱亜入欧に日本近代化の方途を探し求めた。この視察の一部始終は随員久米邦武編の「特命全権大使米欧回覧実記」（全五巻）に収録されている。視察団は欧米文明の現実のレベルや種々相、社会の光と闇、日本へ適用するさいの問題点などを各人各様で探り、興味深いが、首脳間でも日本の未来像は文明開化と保守の間をゆれ動いた。しかし、日本の国際的地位を高めて欧米と対等にし、不平等条約改正への合意を求める企図は失敗に終わった。

視察団一行の途中の行動や評価をみると¹⁸⁾、アメリカのサンフランシスコではカリフォルニア銀行の創立者ラルストンが使節一行を郊外にある別荘に二度までも招待しているが、ラルストンの伝記によると、酒好きの岩倉公はすっかり美酒に酔い、ベルサイユ宮殿を模した鏡の間

（18）泉 三郎稿「なぜ今百年前の欧米紀行か」、日本経済新聞、1985年11月21日。

で優雅な音楽にのって男女が踊る様を目の当たりにして、「まるで夢のようだ」とつぶやいたりしている。またイギリスではあちこちの貴族や名家から招待を受け、そのうちのいくつかの館を訪れているが、その一つ、名門公爵デボンシャイヤー家七世の日記によると、「私は家中を案内し、台所、地下室、庭園もみせた。彼らは大変な興味を示し、とりわけ噴水をほめた。大使（岩倉）は英語を全く話すことができないが、通訳を介していろいろ質問をした。彼は大変インテリジェンスのある人物と見受けた。随員の中には英語をよく話せる者も何人かいた。」ここで使節一行は家族とともに会食しているが、「彼らは大変によく食べ、大変よく飲んだ。」と記録されている。

以上のことは、視察団一行が日本人としてのプライドを保ちながら、異国が差し伸べる歓迎や好意に融け込み、文明の成果を目のみならず、舌で味わうなど、その真髄にいかんなく触れたことを示すものである。また、視察団一行は欧米文明のあり方、すなわち民主政治、資本主義経済、近代化技術などを具体的に実際の目でとらえ、彼らなりにそれぞれ判断や評価をしているが、それをどのように日本へ導入するかの過程や方法に焦点が置かれ、各人各様の意見が出て、統一した見解を打ち出すまでには至らなかった。

それでは、日本の文明開化がどのように生まれ、またどのように進められたのであろうか。文明開化は、近代西洋の文明を導入しつつ、国民の精神から政治、経済、社会、技術のあり方までを全面的に変革していく政策で、明治初期に展開した動向をいう。

幕末に西洋各国が激しく渡来し、緊迫化が増大するにつれて、一部の武士階層の間に日本全体を一つの政治単位にしようという考え方が生まれ始め、各国に対抗して日本の独立を達成するためには、近代的な西洋の文明を導入する以外に道はないという思想が現れてきた。こうして日本の近代化指向の路線がしだいに展開していくことになるが、その推進者が「東洋道徳・

西洋芸（技）術」の観念を主唱した佐久間象山である。象山が目標としたのは、対外的危機を克服するため海外の事情を知ると共に、西洋の科学技術を取り入れて国力を充実することであった。このため、とくに海防に専心し、直ちに江川太郎左衛門に入門して西洋砲術を学び、やがて西洋砲術の塾を開いた。また象山はみずからオランダ語を学び、武士層の間に蘭学が広がる道を切り開いたばかりでなく、西洋の軍勢力の基礎を学ぶため、自然科学にまでさかのぼり、摂取しようと努めた。

ペリー来航後になると、国防は軍事より政治の問題であり、民衆の合意をはかることが根本であるという考え方が現れ、儒教の民本主義的な観念が見直されると共に、近代西洋の立憲的な民主的な思想や制度が理解され、評価され始める。こうして社会政治の面でも西洋文明を摂取しようとする動向の基礎が築かれていくが、この動向は西洋議会制度の影響のもとにつくられた列藩会議論という形で明治維新実現の過程で大きな役割を果たすことになる。⁽¹⁹⁾

次いで、明治維新の過程で大きな原動力となったのは王政復古であるが、文明開化は明治元年に天皇の誓約という形で発表された「五ヶ条の誓文」の第四条（旧来の陋習を破り、天地の公道に基く）、第五条（知識を世界に求め皇基を振起する）にみられるように明治新政府の基本政策の一つとなった。翌二年の版籍奉還を経て、四年に廃藩置県が実現されると、文明開化はしだいにクローズアップし、本格的な展開を示してきた。文明開化を思想面でバックアップしたのは明治六年に発足した「明六社」で森有礼を中心に西周、加藤弘之、福沢諭吉などの一流知識人が参加して活動を始めた。彼らは、①人類の普遍性を信じ、日本も西洋と同一の史的発展をするとする観念、②人間の感性的自然を解放し、現世的幸福を追求する指向、③自然科学を学問モデルとして重視する態度、などでは一応の共通性をもって文明開化を啓蒙した。なかでも福沢は、西洋文明の精神と外形を区別

(19)横手通有稿「文明開化」、平凡社大百科事典、1985年。

し、その精神では国民独立の気風と自然科学的な思考を摂取することにより、民衆精神のあり方を根底から変革しようと試みた。彼にとっては、これはそのまま日本の独立を達成するための唯一の方法であり、文明開化と対外的独立は不可分の関係にあった。⁽²⁰⁾

これに対し、明治新政府は個人の自由権利の普及を推進したが、その目的は軍事機構や法律制度、そして、それを支える工場、輸送、通信、学校の諸制度など、欧米の文物制度を導入することに注がれた。こうした制度輸入型近代化は制度的・技術的な面における近代化と民衆の精神の次元における近代化を跛行させるだけでなく、官と民、中央と地方、都会と農村との間にむしろ逆比例的な発展をもたらす。このため、士族層、農民層から政府の文明開化に対して反抗が現れた。これは、①伝統的な立場からする近代化への抵抗、②自由権利の觀念の普及による自由民権運動の台頭、の二つの展開をもたらした。このため、政府は民衆の自発的行動の抑制や伝統的な道徳の復活・再生などを企てたが、一方では、制度輸入型近代化を推し進めた。⁽²¹⁾明治十三年以降、明治新政府は条約改正と結びついて風俗、慣習から文芸、さらに宗教の面にまで欧風化を促進する政策を打ち出した。

また制度輸入型近代化で注目されるのは欧米の教育制度や学問・思想が導入され、明治五年の学制は欧米の学校制度をモデルとしており、一方、多数の御雇外国人を政府顧問、学校教師、技師などに採用して、先進的な学問、技術の直接的な摂取をはかろうとした。御雇外国人は明治二十五年には政府・民間を含めて570名に達するが、彼らは日本の近代化に不可欠の頭脳として尊重された。さらに多数の官費留学生の派遣を初め、旧藩主やその他の後援によって留学したものもかなりの数にのぼった。明治十年には東京大学が高級官僚や学者・技術者の養成機関として設立された。⁽²²⁾

(20)横手、前掲稿。

(21)横手、前掲稿。

(22)宇野俊一稿「明治時代」、平凡社、前掲書。

文明開化の影響を受けて、東京には洋館が出現し、夜はガス灯がともし、鉄道馬車や人力車が走り、洋服姿の官員や紳士たちが闊歩した。食生活でも牛肉やパンを食べるようになり、そのほか、様々な面で新しい生活や風俗が出現した。だが、そうした文明開化の世相は東京や大都市の一部に限られたものであり、地方の町や農村での生活はまだ江戸時代そのままの様相が続いていた。しかし、錦絵やおのぼりさんによって伝えられる文明開化の風俗と、書物や学校の教師などを通じて紹介された新しい思想は、やがて自由や民権の言葉と共に町や村々の文明開化を触発させていく契機になった。⁽²³⁾

明治初期において、文明開化の政策が軌道に乗り、華々しい展開をたどったのは、下記の理由によるものである。

- ① 列強の外圧が大きくなる政治危機を迎え、それを克服するためには、国民全体が一丸となって西洋文明の優れた技術を導入し、近代国家として独立することが必要であるという思想が一部の武士階層の間で生まれた。
- ② 薩長などの武士階層は幕府が踏み切った開国政策に反抗し、尊王攘夷を掲げて武力行動を展開したが、幕府倒壊に成功し、新政府が樹立されてから王政開国へ転換した。これは、彼らが夷狄への理知的処理性を見出し、剣をかざしての直接行動から夷を以て夷を制するという間接戦略へ移行し、次いで、西洋事情などの歴史的認識を深め、積極的な進取政策に転換したことを意味する。⁽²⁴⁾
- ③ 幕府が長い間、鎖国政策を取ったにもかかわらず、長崎出島にオランダとの国交を維持して交流・貿易の道を開き、西洋文明の技術や学問を取り入れる余地を残したことが、その後の文明開化の展開を促進する基礎をつくった。

(23)宇野、前掲稿。

(24)マリウス・B・ジャンセン、芳賀 徹訳「坂本龍馬と明治維新」、1961年。

④ 鎖国から開国への転換、西洋との自由取引の進展、外国知識人の来日と活躍、鉄道や通信などの敷設などを背景に、日本人の西洋化指向が急速に台頭し、外国から学問、技術、芸術などを取り入れて知識化をはかる和魂洋才の発揮、衣食住を中心に洋風化ないし和洋折衷を進める動き、などが高まりをみせながら展開した。

⑤ 日本人が西洋文明を受け入れ得たのは、昔から中国の文物を学んできた習慣が働くからであり、またとくに自然科学を学び得たのは、彼らが合理主義的な儒学を身につけ、科学の真理を追求しようとする旺盛な気質をもっていたからである。⁽²⁵⁾

⑥ ペリーの来航によって日本の転機を迎え、開国へと踏み切ったのは老中堀田正睦であった。堀田がその決意をしたのは、幕府が登用した若手の有為な官僚たちの海外事情調査研究の結果に基づいたものであり、世界の情勢を知り、列強の間に処する日本の国際的地位を見極めたうえでの決断であった。これは幕末に六回も海外使節団を派遣して、西洋の政治経済や文明開化の実情を見聞させた幕府の力強い政策が大きくものをいっていることを示すものである。⁽²⁶⁾

以上のうち、とくに注目されるのは⑤の理由である。

日本人は中国の文物を学んできた長い間の習慣を基礎に、幕府時代にはオランダの知識から自然科学を学び、そのうえ、日本の学者は合理主義的な儒学の知識をもっていたので、それを容易に自分のものとすることができた。日本人が西洋の自然科学の理論をよく理解し、またそれを応用する技術を養い得たのは、いわゆる蘭学者の好学の熱情と、科学の研究によって到達した真理に対する強い愛着と、断えざる努力と、世の誤解や非難や、ときには圧迫が加えられたにもかかわらず、この新しい学術の習得に心身

⁽²⁵⁾ 津田左右吉「文学に現はれたる国民思想の研究五」、

津田左右吉全集第八巻、岩波書店、昭和39年。

⁽²⁶⁾ 津田、前掲書。

を捧げつくした不撓の勇氣と、のためである。そして、それには当時の武士的気風のよい側面が強く働いていたと考えられる。⁽²⁷⁾一方、これを他の観点からとらえた、うがった見解がある。

わたしたちは日本の文化と思想の文脈のなかで、各項目を通じて、しばしば現れる同じモチーフのあることに気づいた。その一つは「三角形の力学」あるいは「三極論理」ともいうべき独特のバランス感覚と思考形式である。日本はずっと絶対的権威者の存在を好まない。一者による多数者の支配をきらう。様々の力のすべてに優先するような力の持主がいては、おさまりが悪い。かといって、いろいろなものがばらばらに存在するのではない。相対する二つの力の競合というか、形を取ることで均衡が保たれる。だが、さらに検討してみると、二者の対立均衡を支えるもう一つの別の存在のいることがわかる。……日本ではあらゆるものが両極の対立ではなく、鼎立の形を取る。仲人の機能も応援団長の役割も、日本における鼎立原理の一環として理解できよう。⁽²⁸⁾

その二は習合力の強さということである。日本人はよく妥協性があるとか、模倣がうまいとか、抱擁力に富む、などといわれている。確かに、過去二十年の歴史のなかで、様々な外国の文物をたくみに自分のなかに取り入れてきた。しかし、よく考えてみると、向こうのものを取り入れるには、必ずこちらにそれを受けとるだけのものが用意されていた。日本自身が文化的にも、思想的にも高い蓄積をもっていればこそ、実に様々な外国の文化・思想を取り込み得たのである。これは、妥協とか模倣とか抱擁とか、という言葉で表現するのは正しくない。習合という歴史的概念があったが、まさにその習合である。……習合といえ、必ずしも全面的、体系的輸入ではないということが重要である。向こうのものを取り入れるに当たって、日本人は向こう側の体系を意識していない。取り入れたものが外国でどのように組織づけられている体系

⁽²⁷⁾ 津田、前掲書。

⁽²⁸⁾ 梅棹忠夫「日本学周遊」、筑摩書房、1989年。

の一環であるにせよ、体系のなかから、ある部分だけを切り取って、たくみに自己の体系のなかに取り込んでしまうのである。体系のなかで必要かつ意味のある部分を取り入れるのであって、体系そのものがどうなっているかは問わない。あんパンは西洋の食体系のなかから、パンという丸い形をした簡便携帯食という点だけを取り入れて、まんじゅうやうどんやせんべいという日本の食体系のなかに組み込んだ。だから外国から取り入れたものだけに注目してみると、いかにも一面的であり、非体系的であるかのようにみえる。しかし、一見でたらめかつ乱脈な取り入れ方をしているようにみえても、取り入れたものには、ちゃんとした意味と機能がわれわれ自身の体系のなかで与えられているのである。⁽²⁹⁾

このように、日本人は主体価値としてのココロや学問が従属価値としての西洋の自然科学や技術を受け入れ、その真理を究めることにより、全体としての国民価値の器を大きくし、その価値を高めることができたわけである。これを支えたのが、日本人の思考方法における鼎立の原理や習合力の論理であったといえよう。

なお、日本人の文明受入れのあり方をもっと深く研究すると、日本人の気分の根底には、日本の文明がいわゆる先進国に及ばないという一種の劣等感があるが、それにはその先進国の文物を学び文明を摂取することによって、それと同じ地位に進み得るものとする希望と信念とが伴うので、そこにそれを学ぼうとする熱情と努力との根源がある。日本の文明（化）が急速に西洋から学ばれた新要素を加えてきたのは、これがためである。けれども、他を学ぶのは何ほどの程度または何等かの側面において自己を棄てることであるから、そこからかかる態度に対して一種のあきたらぬ情が起こる。歴史的に特異の文明（化）を形づくってきて、そこに一種の安住の地を得ていた近代の日本人においては、それが当然である。とくに西洋の文明が尊重せられるにつれて、徒らに西洋人の生活の外

(29)梅棹，前掲書。

形や末節を模倣することを努め、また模倣し得ることに誇りをもつ如きものが流行的に現れてくるので、そういうものに対する反感もこの感情を助ける。明治の前半期における軽浮な西洋模倣と頑冥な国風保守との対立はかくして生じたが、これは自己と他とは必ずしも相反し、または相克するものではなく、自己を棄て、他を学ぶことによって自己が成長するものであることに思いを致さなかったからのことである。⁽³⁰⁾

自己は固定した自己ではなく、自己を保ちつつ絶えず変わっていく動いていくところに真の自己があるからである。自己とは現実に生活する自己であるが、生活は絶えず新しい事態に順応し、新しい事物を領略しつつ刻々に移りいく過程として成り立つものだからである。明治年間に欧化主義と国粹主義の名によって対立していた二つの主張は、このことに注意せず、西洋の文明と日本のとをそれぞれに固定したものであるかの如く考え、生活の姿としてではなく、概念としてそれを取り扱ったところから生じたものであろう。西洋の文明を学ぶことによって日本人の生活は変化するが、それと共に日本人の生活がその文明を変化させる、ということも深く考えなかった。欧化主義が西洋文明の皮相を模倣するものとせられたのも、国粹主義が頑冥と評せられたのも、この点であって、その学ぼうとすること、保持せんとすることが生活から遊離しているからである。ただ問題は、自己を保つことと自己の変化することとの生活そのものにおける働き合いが如何なる状態において行われるか、ということである。どれだけ、どういう点において、またどういう風に、日本人の生活が西洋化せられ、西洋の文明が日本人の生活によって日本化せられるか、世界的共通性をもっている自然科学の知識及びそれによる技術においてすら、人の生活に及ぼすその働きには生活の違いによって自ずから違うところがあり、また生活の違いが自ずからそれを利用する態度や方法の違いとなることがあるから、それが事実どういう状態であるか、これらのことが

(30)津田，前掲書。

考えられねばならぬのである。保守せんとする国風が、実は概念として存在するのみであって、生活のうえにおいてはすでに西洋文明の影響を受けて変化しているものもあったろう。あるいは西洋の文明に関する何ほどかの知識をもっているがために、その知識によって在来のももの価値が認められ、保守すべき国風であることが考えられたものもあろう。⁽³¹⁾

これからうかがえるように、己を棄て、他を学ぶことによって成長する、すなわち自己は固定したものではなく、流動していくところに真の自己があるというこのとは、その本質において、日本の生活価値ないしは国民価値は、主体価値としての固有文化がイニシアチブを取って従属価値としての西洋文明を受け入れながら、その価値を高め、成長していくというよりも、むしろ、これは近代国家の成立、外国交易の推進、自由民権の普及、文明開化の展開などを背景に、従属価値としての西洋文明のウエイトが固有文化のそれを上回り、全体としての生活価値も変化したことを意味するといえよう。すなわち、日本人の生活価値は、固有文化を固定的に保持するのではなく、西洋文明を導入する影響で、逆に固有文化自体を流動的に変化させ、それによって新しい価値創造をはかったわけである。

この場合、環境変化が正常なときに、日本の生活価値が固有文化を保ちながら西洋文明を受け入れ、両者の変化作用を通じて、どういうあり方を示して成長していくのか、あるいは、環境変化が異常なときに、その生活価値が西洋文明のウエイト増加から固有文化がどう影響され、どういうあり方を示して改変していくのか、というメカニズムを追求することは難しい。ただ、ここで明らかなのは、「文化の充実が文明の発展をもたらし、文明の発展が文化の充実をもたらす」ということである。

環境変化が異常なときに、従属価値が固有価値よりも大きなウエイトを占めて、国民の基本価値の改変をもたらしたのは、明治維新の例の

みならず、第二次大戦直後の例が挙げられる。第二次大戦中、日本は米英などを敵国に回して戦争したが、敗戦後はマッカーサー総司令官の方針によって、アメリカ型の民主化へ積極的に転換し、象徴天皇制のもとに平和憲法を世界で初めて確立したことなどにより、従属価値が大きなウエイトを占め、固有価値の変貌とあいまって国民の基本価値の変革をもたらした。

日本は初めて戦争に敗れたので、310万の人命の損失を初め、それまで領有していた朝鮮、台湾、南樺太、千島列島などを失い、東京、名古屋、大阪など主要都市は焼野が原となり、広島、長崎の二都市は原爆にさいなまれるなど、日本人は一転、虚無感に陥り、再起どころか、茫然自失の状態であった。日本人にとって、これから先食べものはどうなるのか、住宅はどうなるのか、ヤミヤで一時はしのげるが、働き口はあるのか、など私的な問題から、天皇制が護持されるのか、民主化がどう進むのか、経済再建ができるのか、など政治、経済のマクロ的な問題に至るまで、先行き、一体どうなるのかの不安で、まさに疑心暗鬼というところであった。これは日本人のココロの主体価値とモノの従属価値を網羅した基本価値の喪失を意味する。

マッカーサー総司令官は日本への緊急食糧援助を初め、戦争犯罪人の処分、平和憲法の制定、婦人参政権の実施、財閥解体、軍需工場解体、集中排除法発動、農地解放、労組結成など、政治の民主化や経済の自由化を推し進め、昭和25年以降、日本の政治、経済の前途に明るさがみえてきたので、日本人の基本価値において、これら従属価値の変化が主体価値に影響を与え、全体としての国民価値も基本的人権の尊重と信仰、思想、学問、言論などの自由を基軸に平和維持、経済成長、福祉向上を指向して新しく形成されることになった。これは、アメリカのモノ、技術、ノウハウなどの従属価値の拡大が日本人のココロにやろうとする意欲を呼び起こし、全体としての国民価値に新しい点火を行って、ようやく戦後再建の盛り上がりを見せてきたことを示すものである。

(31)津田、前掲書。

2. 日米間の貿易摩擦と文化摩擦の問題

日米間の当面の経済課題は、日本にとって、①アメリカの製品やサービスの市場を受け入れ、それを拡大していく、②アメリカ企業の進出を受け入れ、それを拡大していく、③政府や地方自治体が行う公共事業などのプロジェクトにアメリカ企業を参加させる、ことにあるが、これらについて、現在、大店法などの商取引規制、生ぬるい独禁法の内容や運用、複雑な流通機構のあり方、など大きな障害があり、それを打開するために打ち出しているのが日米構造協議である。アメリカの日本市場開放の要求に対し、日本は、商取引規制を漸進的に緩和するとか、独禁法をこれまでよりもっと強化するとか、複雑な流通機構をなしくず的に改善するとか、というようにあいまいな対策を表明し、アメリカの諒解を得るにはかなりの時間がかかった。その後、日米構造協議はようやく合意し、両国で最終報告を取りまとめ、フォローアップ（事後点検）することになった。だが、コメの輸入、流通機構、規制緩和など各種問題が取り残され、アメリカは日本に対し新規要求をも考慮している。

これは一般に国際間の貿易摩擦といわれ、各国がそれぞれ国益を維持するために争う経済戦争であるともいわれる。だが、その背後には自由貿易または保護貿易によって影響を受ける各国内の様々なグループ間の利害対立が隠されている。この場合、国益という言葉がよく使われるが、日本車の輸入によってアメリカの自動車産業が打撃を受けるのはアメリカの国益に反し、コメの輸入は日本の農民に弊害をもたらすので日本の国益に反するという論理である。しかし、安全で燃費効率の良い日本車の輸入によって、自動車を利用するアメリカの消費者は利益を受けるのに対し、安くて良質なコメの輸入によって、日本の消費者は利益を受ける。このように、貿易の自由化や保護貿易政策によって、国内の様々なグループが利益や不利益を得たりするので、国益ということにはならない。⁽³²⁾

一般に国際間で政府の代表者が貿易交渉を行うが、その背後にはさまざまな国内利害の対立が隠されている。アメリカの消費者は製品の貿易自由化によって、安い輸入製品が手に入ることで日本の輸出産業と利害を共にし、日本の消費者は農産物の貿易自由化によって、安い食料品が求められるので、アメリカの農民と利害を共にする。したがって、各国は貿易交渉の場において、一方では自国の生産者と消費者の政治バランスを考慮し、他方では相手国の消費者に働きかけるビベイベアを打ち出す。しかし、各国は一般に自国の政治バランスを考慮するものの、生産者の強い働きかけで生産者の利益を代表するようになる。これは、広く薄くいきたる消費者の利益よりも、なによりも切実で政策に反映されやすい生産者の利益が優先されるからである。とくに日本政府の代表者は消費者よりも生産者に与する姿勢が目立ち、生産者の立場を重視する論理にコミットし過ぎている。

それを典型的に示しているのがコメ輸入の問題である。これについて、通産省や経団連はコメ市場の開放に傾いているが、農林水産省は開放抑制の姿勢を貫いている。EC各国も農産物の市場開放に対しては消極的で、日本と同様な姿勢を打ち出している。確かに、日本にとっては米は主食であり、いざというときには、世界のコメ需給の動向に左右されず、自国産のコメの供給で国内需要を下支えるという安全保障体制（Social Security）を維持することが必要であろう。しかし、日本のコメはアメリカ、その他外国のコメに比べ、七倍以上という異常な割高である。日本人は平均的に中産階級だと自称しているとはいえ、それだけ食費のエンゲル係数を高くし過ぎていることは問題であろう。これは農民保護のツケを消費者が高い価格で支払っていることを意味する。

これは国際間の経済問題というよりも、むしろ政治問題であり、とくに日本の行政当局が最近、ようやく消費者行政へ目を転じてきたとは

⁽³²⁾ 浜田宏一稿「貿易摩擦—背後に国内利害の対立」、

日本経済新聞、1991年1月9日。

いえ、コメについては依然として消費者サイドよりも生産者サイドを貫き、生産者優先の政策を打ち出していることに根因がある。日本の消費者の多くがアメリカの外圧を密かに待望しているという声が聞かれるが、これは消費者の切実な思いや願いを反映するものである。

一国の経済政策のあり方としてはモノやサービスを売り、売って、それによって国民総所得を高めていくことが基本課題となる。これを裏返していえば、国民総支出の大部分は消費支出が占めているので、消費支出への対応もまた大きな課題となる。もし各国が貿易自由化を指向して生産者サイドよりも消費者サイドを優先する姿勢を打ち出せば、保護政策を初め、政府規制などの障壁はほとんど取り除かれ、貿易摩擦問題はスムーズに解決することになるだろう。したがって、各国が製品・サービスの貿易自由化を通じて、国民総所得を増やすためには、相手国に良質安価の製品・サービスを供給する、市場の最優先原理としての国際競争力の強化が基本課題となるだろう。しかし、そうした転換が難しいところに、各国の事情や問題があり、その背後にはそれぞれの国の考え方の相違がある。したがって、国際間の貿易摩擦の問題は、その奥底をたどれば、相互に貿易する両国の価値観や思想の相違に還元し、つまりそれぞれの文化の相違が根底において影響しているとみられる。このため、貿易摩擦の問題はまた文化摩擦の問題だといわれることになる。

いまのところ、日米構造協議はフォローアップの段階にあるが、日米間の大幅な貿易不均衡や対日進出のアメリカ企業の不満など問題は残されたままであり、そのうえ、最近の日本の対米投資の拡大に対し、「日本はアメリカを買おうとしている」との反発がアメリカで強まり、アメリカ人を極端に不愉快にさせている。それを反映して、日本の社会や文化は欧米とは異質であるとする「日本異質論」が盛んになり、とくに対日政策を従来とは異なる立場に立って、より強硬なものにすべきだというリヴィジョンリスト（修正主義者）の見解が目立っている。そ

のうちの一人であるカレル・ヴァン・ウォルフレンの近著⁽³³⁾をみると、冒頭で、下記のように述べている。

「日本は世界を当惑させている。いまや世界の大国になった日本、それにもかかわらず、世界の大半が期待する大国にふさわしい態度をとらないばかりか、時として、国際社会の一員になりたいと思っていないよう印象さえ与えている。同時にまた、日本の強大な経済力の存在は、欧米諸国や一部の近隣アジア諸国に不安を抱かせている。一方に日本、もう一方にアメリカ・ヨーロッパを対置させた構図から見ると、その関係はいま、重大な局面にさしかかっている。1980年代の後半になって、日本は政治・貿易パートナーとして、その責任を果たせないのではないかと、欧米諸国が懸念を抱きはじめた。一方、日本では、官僚や著名な評論家が、日本は広範に国際的な悪意の犠牲にされていると口をそろえて言いはじめた。日本の発言者はとかく自分に都合の悪い分析は日本たたきとして簡単に片づけてしまう。」⁽³⁴⁾

これは、日本が国際化のニーズに対応せず、その責任を果たしていないことを強調し、今後も引き続き日本の態度に変化が現れるのは期待できないことを示唆したものである。ウォルフレンは、日本がこうした国際化のニーズに対して、相手国の意見や考え方を聞かず、独善的態度を維持しているのは、日本人の文化の特質や文化にかこつけた権力にあるものとして、それらを鋭く分析している。それらの要点を取り上げると、下記の通りである。⁽³⁵⁾

- ① 日本人は自分たちが本当の動機と表面的な動機の間で制度化されたギャップをもつので、外国人や外国の動機も疑いがちである。彼らは日本の状況や二国間の関係につ

(33)カレル・ヴァン・ウォルフレン、藤原 勝訳「日本権力構造の謎 上・下」、早川書房、1990年。
(Karel van Walferen, The Enigma of Japanese Power, 1989)

(34)ウォルフレン、前掲書上。

(35)ウォルフレン、前掲書下。

- いての外国の分析の背後にある、隠された本音をあくまでさがそうとする。
- ② あるアメリカの人類学者は日本と西洋の教育を比較して、こう結論を下した。「論理教育は西洋文明そのものと同じように古い。これと対照的に、日本は伝統的に……暗記と模倣を強調してきた。前者のアプローチは道徳的、知的な考え方の枠組みを内面化するのに役立ち、後者は環境への適応を助成する。」
- ③ 明治維新後の日本人ほど、新しい思想を大量に吸収するのを感じた人びとはほかになかったであろう。国の改造が進む中で、おびただしい雑誌や研究会が新思想を日本中に広めた。だが、武士階級であったエリートや教育を受けた平民の新しい階級が心酔した諸思想は、一般的にいって、もともとの思想が発生した文脈から外れて伝えられたものであった。
- ④ 戦後日本の一部の知識人は、普遍的原理が政治過程や個人個人の目的の是非が判断される場合に適用されないことに悩んでいた。彼らは、こうした原理を適用しないことが日本社会の多くの欠点だという。しかし、国家主義的な傾向のある日本人は、日本人の考え方の柔軟性を美点だと考えているようだ。ある政治家は、日本人はその柔軟性のために、西洋人に比べ有利な立場に立てると示唆した。
- ⑤ 西洋、中国の宗教哲学は伝統的に二分法や二元法を欠かせないものとしたが、日本人はそれを避けることを日本的なものの真髄とし、讃えた。日本の古典学者の一人、本居宣長は、善悪を峻別しないことに憧憬の念を抱き、「すべて神の道には儒仏の道のように物事を正邪や善悪によって評価するような議論はひとつとして含まれていない。神の道は富裕にして寛大で優雅である。」と述べている。
- ⑥ 日本は中国や他のアジア諸国よりも比較的容易に近代工業世界の仲間入りができた。その理由の一つは、超越的信念に基づく強固な戒律がまったく欠如し、物質面での変化に対応するのに必要となる精神面の変化を妨げるものがなかったからである。まさに、この国は近代化のために多くの新しい考え方を必要としたが、その影響を押しとどめるほど強い知的抵抗も道徳的抵抗も存在しなかったのである。自己にとっての真理に行動を制約されるという伝統がなかったから、日本人はあることを信じながら完全に別のことができる。形式的に西欧の政治制度や理想を取り入れるのは比較的やさしかった。というのは、外国の概念や信条を日本自体の必要性に適するように、その本来の目的とは異なった道具として使うことに伴う道徳的矛盾を感じなかったからである。
- ⑦ システムの結束力、すなわち国民に網をかけ、めんどろな批判家を封じ込め、脅威になりそうなグループを骨抜きにするシステムの見事なやり方、これは日本に支配の中心がないということに気づいた人を不思議がらせるにちがいない。これは日本人の個人的な志向が抑制されているためである。この抑制はほとんどの社会的状況とすべてのレベルでみられ、予想どおりに規律正しく振舞うようにさせる人格形成の過程で加えられる。
- ⑧ 日本社会の調整力や推進力に思いをやる日本人はほとんど、それらの力の源泉は日本文化だという。日本人は人と調子を合わせて働き、自分の個性を抑え、完全に会社に身を捧げ、権威に協力すると彼らはみずから述べている。調和と忠誠が日本文化で最高の価値をもつとされるからである。また日本人はみずから日本文化を終始引き合いに出すが、この自己意識にイデオロギーの機能がある。事実、文化がすべての状況下のすべての日本人の動機を説明するのに酷使されすぎる。日本人は文化の動機によって決められた動機のほかになにもの

い。国民全員が同じ自律神経に支配されているとでもいいたいかのようだ。

- ⑨ 日本の役人、評論家、ビジネスマンは、外国人が指摘する、日本が当然すべきことを実行しない理由として、いつも決まったように文化をもち出す。日本人は、「貿易紛争において、伝統的な社会的調和、長年の孤立や微妙に敏感な国内事情といった文化的な事情を根拠に、自分たちの事情を理解してほしいと訴えるのであって、……それは国内業者にとって望ましくない外国業者との競争を強いることになるとは決していわない。」
- ⑩ 一般の日本人にみられる異常なほどの画一化と順応は、服従の態度を伝統的に教え込まれることで維持される。服従を通して忠誠心を育て、個性をなくすような人格形成が、日本の子供のしつけと教育を支配しており、大人になってからの生活でも最も重要視される。この教育方法に力を与えているのは、一般にはイデオロギーとはみなされていないイデオロギーである。それは文化的分析という立派な衣装でよそわれたイデオロギーである。
- ⑪ 大和魂のイメージを鼓舞するもろもろの考え方の中心は、普通、英語ではsincerityと訳される、まことの理想である。しかし、日本ではまことを計る基準はやや変わっている。西洋の言語と同じく、外部の世界に示すものが自己の内にあるものと一致するというのが表面上の意味である。ところが、まことがあるというのは、自己の自然な気持ちを表すのではなく、自分の考えや感情を無理にでも周囲の社会の期待に添うものにすることを意味する。理想的には、内なる自己を奥深く沈めて、良心を自分の振る舞いに適合するように変えることである。日本人が相手に自分を合わせる態度は疑いもなく、日常の人間関係を快くし、和らげる環境をつくり出している。
- ⑫ 日本人論と呼ばれる各種の著作は、日本

人は比較のしようもないほど異色だという考えを強調するにとどまらず、さらに、日本人のあり方は世界の他の国々より優れているので、より好ましいとしばしば主張する。日本人論はがいて、日本人は普遍的な価値を信じず、論理的でないと認めている。そして、このような特徴は利点とされ、そのため、日本人はそのとき、その場の具体的な状況により身近に触れることができ、他人への敬愛も厚いという。西洋の慣習や作法はドライで硬いといわれ、日本のほうはウエットで柔らかいといわれる。

- ⑬ 日本人論に欠かせない要素であり、日本のいまの政治イデオロギーの中核概念になっているのは、日本人が単一の民族だという説である。民族的な純粋性と社会の単一性をうたう古い神話が装いも新たに復活してきているのである。これは別の言葉で、日本人の同質性を意味する。しかし、この説は次の事実を無視している。まず日本では地方によって慣習も態度も関心事も大いに異なる。またそこには約三百万人の被差別部落出身者、百万人近くの日本生まれの朝鮮・韓国人のほか、沖縄人や少数のアイヌ人がいる。さらに韓国や中国やそのほかの外国人の子孫で、最近、帰化したり、日本で生まれたものが、数十万人もいる。だが単一民族説によって、日本には少数民族グループは存在せず、皆が同じように集団を第一にする倫理によって動く事実、日本人は誇りをもつようにいわれているのだ。
- ⑭ 日本人はシステムが要求する規律をいとも平然と受け入れる。単に国民の大半が疑問すら抱かないからである。日本人の生活や文学を熟知する研究者、エドワード・サイデンステッカーはこういう。「日本社会を理解する鍵は、日本人がノーをいうように教えられていないことを理解することだ。」
- このうち、サイデンステッカーが日本人はノ

ーとはいえない心の持主であることを指摘したのは、日本人が一面順応型、他面拒否型の二面性を持ち、基本的には日本人が建前と本音を使い分けることをコメントしたことで注目に値する。

以上のように、文化の面まで降りて日本の政治体制を洗い、その修正を迫った、ウォルフレンの日本異質論に対し、それに反論する、シュミーゲロウ夫妻の「戦略的プラグマティズム」の研究が発表された。それによると、「日本は異質な国ではない。世界は日本を敵視せず、日本経済を成功させた戦略的プラグマティズムの教訓を学び、実践すべきだ。」と主張しており、先般、来日した夫人のミシェル・シュミーゲロウの日本経済観は、下記の通りである。⁽³⁶⁾

「私たちは一方的な日本たたきキャンペーンには賛成できない。日本とアメリカのどちらが悪いわけではなく、また日本がいわれているほど異質とは思わない。……日本では徳川時代に町人階級のなかに最初の資本家が生まれた。鈴木正三、石田梅巖は町人に向かって勤勉、儉約、貯蓄、投資が道に適うと説いたが、それはプロテスタンティズムに通ずる価値観だった。こうして、商人たちは経営者に成長し、開国後の新しい事態に素早く適応することができた。日本はその後も、政策と欧米の社会制度を巧みに組み合わせ、プラグマティズムを完璧に駆使してきた。……戦略的プラグマティズムはグローバルで、長期的な視野に立った目標がなければ、問題が出てくるかも知れない。しかし、これはドクトリンではなく、継続的なプロセスである。またこれは、世界が絶えず変動し、我々が不確実な時代に住んでいることを意識したプリンシプルであるから、行動に誤りがあれば、修正できるという強みがある。……日本の戦略的プラグマティズムは他国にも適用することができ、各国は日本の経験に学び、実践すべきである。プラグマティズムは日米共通の哲学や価値観であり、欧州にはこの伝統は育たなかったが、国際社会ではプラグマティックにならざるを得な

⁽³⁶⁾ ミシェル・シュミーゲロウ「間違っている日本異質論」、毎日新聞、1991年4月5日。

い。経済的な厄介ごととはすべて“ジャパン・プレミアム”にして行動せず、日本の経験など異質で取るに足りないと無視する国々は、自らの前途を閉ざすに等しいといってよい。」

このように、シュミーゲロウの普遍的な経済理論による解明や日本全体像の考察は、相互理解の助けとなり、日本たたきの予防になるかも知れない。彼女のいいたいのは相違点ばかりでなく、共通点をとらえて、よりよい未来のためにそれぞれの国が共に働こうということである。

最近、文化相対主義が注目を浴びてきた。日本社会の国際化を考えるに当たって、日本文化と他文化との力関係を分析しておくことほど重要なことはない。文化相対主義は文化至上主義と対比する概念であり、前者は自分の所属する文化を最上として、それを他に押しつけようとする考え方であるのに対し、後者は一つの文化の絶対的な優越を認めず、ある文化の基準で他の文化を裁くのは間違っているという考え方である。東西ドイツの統一、東欧圏諸国の民主改革、ソ連邦圏共和国の独立機運、南ア連邦民族勢力の合法化、その他各地の少数民族の台頭など世界権力の分極化を背景に、文化相対主義はしだいにウエイトを高めてきた。

世界史の現時点では、欧米文化が国際間コミュニケーションの枠組をつくって、世界の文化権力を握っている。英語が国際交流の中心言語であること、世界共通の暦がキリスト暦であること、社会科学の主要概念がほとんど西洋産であることなど、欧米文化が覇権を握っている例は枚挙にいとまがない。その意味では、日本の文化概念や文化命題が世界で試されることは、一定の均衡効果をもつだろう。それ自体は望ましいことである。しかし、日本から発信される文化相対主義は、日本の経済的な超大国化という事情がからまっていて、複雑な色合いを帯びている。とくに三つの点が気懸かりである。⁽³⁷⁾

⁽³⁷⁾ 杉本良夫稿「経済大国ニッポンの文化相対主義」、毎日新聞、1989年5月15日。

第一に、文化相対主義が経済利権を擁護するための煙幕として使われる傾向が強い。海外の企業が日本で市場を開拓できないのは、日本独特の流通文化が理解できないからだという主張は、文化の違いという論理的道具だてを使って、経済的な現状維持を正当化する側面をもつ。日本は単一民族社会で外国人受け入れの文化的伝統がないから、アジアからの労働者を多量に受け入れるべきではないという議論は、戦前たくさん低賃金労働者を朝鮮半島や中国大陆から連れてきた事実と符合しない。つまり、経済大国となった日本が文化相対主義を主張するとき、それは文化至上主義としての機能を果たすという可能性が強い。第二に、文化的相対法を論ずるときに前提とされている文化の間の違いが、必ずしも実質的な相違でないことが多い。昨今の日米間の摩擦など、両国の文化の相違よりも類似性を示していると思われる。アメリカが日本市場でのコメの自由化を主張し、日本がアメリカ市場への車の輸入に対する制限に抵抗するとき、その論理構造は非常によく似ている。両方とも議論に当たって論理の一貫性が要件であるという文化的価値を共有しているだけではない。「コメを完全自由化すると、日本の農家の多くが倒れる」と日本がいい、「日本車を無制限に輸入すると、アメリカ自動車産業の失業者が増える」とアメリカがいうとき、両方ともAという条件が現実である限り、Bという命題は事実であるという構造で交渉している。日本の「コメの自由化は漸進的に進める」という提案やアメリカの「車輸出をある程度自己規制してほしい」という言い分は、Aという条件にある種の修正を加えるとBという現実に変化が起るということを主張しているのであって、「AならばB」という論理の組立て様式に挑戦しているわけではない。しかも、「日本のコメは日本人の食生活に根ざしている」とか、「アメリカ人にとって車は生活そのものである」といった立論は、「日常生活に深く入り込んだ製品が競争力をもたないとき、国家が介入するのは当然だ」という文化的価値を共有している。

違いはその製品がなんであるかにすぎない。第三に文化相対主義の問題とする文化は国家単位の文化であることが多く、各国内のサブ・カルチャー同士の国際的共通性が見落とされがちである。日本国内には女性文化、若者文化、少数民族文化など多種のサブ・カルチャーが存在し、海外諸国も事情はあまり違わない。したがって、国境を越えるサブ・カルチャー間の共通性を基礎にして、例えば、多数民族と少数民族の間の文化相対主義の問題を国際的な規模で考えることができる。国家間のしきいを取り払って、女性文化と男性文化の間の相対主義の問題を検討することも可能だと思う。日本を基盤とした文化相対主義が欧米文化中心主義を打ち破るためには、日本の国益を擁護することを目標としない地点からの思考に最も望みがあると思う。³⁸⁾

このように、日本は文化相対主義をサブ・カルチャー中心に推進すべきであるが、基本的には文化相対主義と文化至上主義はそれぞれ経済、政治の相対主義と至上主義と関連をもっており、それについての関連を示せば、下記の通りである。

文化相対主義

相手国文化の尊重などローカル文化の形成

経済相対主義

相手国への経済支援

相手国の産業育成と経済成長

政治相対主義

相手国の主権尊重

各国の自主的な分権化を指向

相対主義のあり方

対等性タイプ

各国間の均衡維持

文化至上主義

相手国文化の吸収など自国文化の拡大

経済至上主義

相手国への経済進出

相手国への市場拡大と産業発展

政治至上主義

相手国の主権支配

大国の高圧的集権化を指向

至上主義のあり方

優越性タイプ

各国間の不均衡拡大

上記のように、文化、経済、政治の各面で優越性タイプの至上主義は各国間の不均衡拡大をもたらし、ナショナル化ないしブロック化を押し進めるが、均等性タイプの相対主義は各国間の均衡維持をもたらし、国際化ないしグローバル化を推し進める。したがって、各国のこれからの方向は至上主義を抑制し、専ら相対主義を推進して世界平和の達成に寄与することであろう。

一方、日本人は国際化でどういうメリットがあるのだろうか。これについて検討してみよう。

日本というのは不思議な国で、日本にいと日本のことが判りにくくなる。異質の人間や文化との出会いによってこそ、自分が発見できるとするならば、国際化は私たち日本人にまたとない可能性を与えてくれようとしている。真の豊かさはモノの条件だけではなく、ココロの充足感を伴っていなければならない。自分が自分であることを発見し、またあるべき自分にいまの自分を近づけようと努力していく過程に時間のむなしさの入り込む余地はない。国際化はビジネスチャンスの次元だけでとらえるべきではない。それは私たち日本人に真の豊かさとはなにかを考えさせる、またとない機会を与えてくれようとしている。⁽³⁹⁾1990年に日本の海外出国者は1千万人を越えたといわれるが、そのうち、なん人が異質の人間や文化に触れて、自分を見出し、ココロの豊かさを追求したであろうか。一方、同年に外国の日本入国者は350万人を越えたといわれるが、そのうち、多数の外国人が日本人のココロや文化を追求し、彼らなりに評

⁽³⁸⁾杉本、前掲稿。

⁽³⁹⁾市岡揚一郎稿「異文化の出会い大切に」、日本経済新聞、1985年1月6日。

価したものもあったとみられる。

いまから八十年前に岡倉天心が「いつになったら西洋が東洋を諒解するであろう。否、諒解しようと努めるであろう」と嘆いた言葉がある。天心の時代に比べれば、世界のなかの日本の位置は驚くほど変っているというのに、矢張り同じような嘆きを、われわれはいまもつづやいていようだ。「欧米人はどうして日本人のココロを理解してくれないだろう」と。そのために、「もっと文化の輸出を」と叫ばれるようになって、もうずいぶんになる。これは貿易摩擦の深刻化に伴い、モノの輸出だけでは、日本は国際的に孤立してしまうという危惧から出た声である。そこには、国の安全保障の問題としてとらえようとする危機感さえ漂っている。⁽⁴⁰⁾

実際、この掛け声に促されて、ここ約二十年間、さまざまな試みがなされてきた。1972年に国際交流基金は五十億円の政府出資金で発足し、いずれ、一千億円まで積み増すという目標が掲げられたが、82年から出資金額積み増しゼロが六年間続き、88年度予算でやっと上積みされた。当初目標の一千億円は現在の価値に換算すれば三〜四千億円に相当する。その意味では国際交流予算がついたというより、永らく止まっていたのが久しぶりに動き出したところである。これに民間企業や各種団体の文化輸出企画が加えられ、それらも増える傾向にある。しかし、それにしても「文化輸出をもっと」という声はいっこうに弱まっていない。貿易摩擦が恒常的に続いていること、これまでの文化輸出の効果がさほど現れないこと、文化輸出について様々の障害が具体的に出てきたこと、などがその声に拍車をかけていると思われる。

だが、このうち、文化輸出の効果は、例えば十年の単位では、とても出てくるものではないであろう。むしろ百年経って、果たしてどの程度の実効が現れるのか、というのが文化輸出というものではなからうか。明治以降、国を挙げて西洋文明の摂取に努めてきた日本が、西洋と

⁽⁴⁰⁾田村祥蔵稿「文化輸出、急がず本物を」、日本経済新聞、1983年4月10日。

いうものの奥深さを国民的レベルで知るようになったのは、ようやく終戦後のことだったという議論も成り立つ。具体的に挙げていけば、百年間情熱を込めて取り組みながらも、なお理解への道は遠いというものも、たくさんあるに違いない。西洋を目標に馬車馬のようにつき進んできて、なおかつそうである。まして、言葉の障害、地理上の問題、受ける側の必要度や切迫度の不足などを考えれば、日本の文化輸出の困難はおそらく大変なものであり、長い時間が必要な問題である。しかし、だからといって文化輸出の努力を緩めようというわけではもちろんない。目の前の効果を追うあまり、必要以上に現状を不安がったり、いきり立ったりする愚はともかく避けたいと思うのだ。あまり急いでモノの輸出の段階でやった反省を、もう一度、文化の場で繰り返さねばならなくなってしまう。方法論についても、根本のところを考え直してみたいことがある。それは、「最高のもの、本当に優れたもの」の紹介をまず心掛けるべきだということである。日本文化の遺産として、すでに評価の定まっている優れたものを前面に押し立てるべきだ、ということである。ボロは隠そうというわけではない。文化というものは、頂上を見なければ、全容はとらえられないと思うからだ。日本人が西洋文化に取り組んだのも、まず頂上からであった。頂上までの道は遠くても、魅力の度合いが違う。そして、その魅力は時間を経れば経るほど増していくものだ。⁽⁴¹⁾

またいま、海外で日本語を勉強している人は四百万人に達しているとみられ、各国の大学では日本研究が年々広がり、内容も旧来の美術や文学といった分野にとどまらず、社会、経済、政治、科学技術史など幅広いものになりつつある。アメリカでは二校から十校程度の大学が協力しながら日本研究のカリキュラムをつくっているグループが増えている。日本で学ぶ外国人留学生は89年に二万五千人を越え、21世紀には十万人という政府の目標は数のうえでは達成しそうなペースである。ところが、これに対応す

(41)田村，前掲稿。

る日本の態勢、情報はきわめて貧弱である。欧米の一部の国の限られた大学などではレベルの高い日本語教師を擁し、充実した学習を進めている。だが、今後は急増する日本語学習者や留学生の八、九割をアジア諸国の人たちが占めるだろうとみられている。

これに対し、東南アジア諸国の日本大使館に併設している広報文化センター（32ヵ所）のライブラリーに並んでいるのはお座りの大学案内ばかりで、日本語の辞書も現地の日本語教師がつくった簡易辞典のようなものが多い。東京・永田町の日米教育委員会へいけば、アメリカの州立、私立すべての大学の情報がキャッチできるのと対照的だ。このため、アジアの若者たちは日本へこなければ、大学に関する情報入手の機会がない。また日本が海外に設けている情報拠点の数はきわめて少ない。89年で国際交流基金の海外事務所は12だが、ブリティッシュ・カウンシルは136、ドイツのゲーテ・インスティテュートは148の海外事務所をもつ。そのうえ、ブリティッシュ・カウンシルは一ヵ所に英語教師だけで、なん十人も配置し、総職員数は4,400人いるのに対し、国際交流基金は133人しかいない。海外の出先一ヵ所のスタッフ1～2人ではなにもできない。

さらに、外国人による中高校生に対する英語教育、大学生に対する一般・専門課目の指導などのニーズはしだいに強まっているが、その門戸開放はほんの一部に過ぎず、それが今後も拡大していくことはあまり期待できない。ドナルド・キーンはある雑誌の巻頭エッセイで、「日本の英字新聞の投書欄を見ると、毎日のように日本に住んでいる外国人が日本人の国際的意識の乏しさを嘆いている。日本の大学で英会話を教えている英米人で不平等な待遇について愚痴をこぼしている人が多く、日本の国際化はまだまだ実現されていないと嘆く一般読者も多い。」⁽⁴²⁾と述べている。最近、アメリカでいわゆるジャパノロジストの数は着実に増えている。しかし、せっかく育ちつつある彼らの足場が、実は大変心もとないものだといわれる。日

本語を修め、日本を研究しても、まず就職先が限られている。同胞へ強い影響力を行使するどころか、自分の身を心配せねばならぬジャパノロジストとその卵がしだいに増えている。これはおそらく想像以上に大きな問題である。ヨーロッパで学んだ人が各分野の枢要を占めた日本と同じ状態を望んでも、もちろん、それは無理である。しかし、少なくとも、日本を理解しようとする人を大事にする基本姿勢はしっかりともち続けたい。将来が不安になるような勉強に、どこの若者が真剣に取り組むだろうか。⁽⁴²⁾ 転じて、文化・文明の問題を取り上げた学界の動きをみよう。

87年、大阪大学で開催された「比較文明学会」は「文明の交流と動態—国際化と情報化」をテーマに取り上げ、活発な討議が展開された。中谷阪大教授は、①文明の交流のプロセスは諸制度の相互浸透のプロセスであり、その過程が経済摩擦を引き起こす、②その理由は、経済活動は国境を越えてグローバリズムの原理で働き、政治のほうがかつてにナショナリズムの原理で国境に固執するためである、③それは国際化が容易な経済活動の分野が競争を通じて相互に平準化する傾向があるのと対照的に、政治的決定、制度、慣行の多くが一国のなかの原理で動き、国際化が困難であり、この両者が併存しながら摩擦を生むともいえる、④両者の対立による摩擦をやわらげるためには、結局、経済のグローバリズムに制約を加えるか、諸制度の国際化をするか、の選択を迫られると述べ、結論ではグローバリズムを制約する可能性が大きいと断じた。これに対し、伊東東大教授は、特別講義で「みなさんの文明という概念は、いかにも悲観的な結論に導くような感じがする。しかし、私は悲観的にならない。なぜなら、文化というのはより根本的な核の部分であり、価値観、考え方の部分であるが、摩擦に直面しているのは、この部分ではない。摩擦の発生しているのは、

(42) ドナルド・キーン「日本の国際化」、Phase、季刊 どんぱつ No. 63。

(43) 田村、前掲稿。

この核としての文化の周辺にあるコンピュータなどのメカニズム、装置、あるいは近代技術、諸制度などで、これが文明に当たる。後者の文明は外に向かって他の文明とぶつかり合って摩擦を生ずるが、この分野では核となる文化とは違って調整が可能である。」と述べた。したがって、日米間の経済摩擦を解決するためには、譲れない文化と調整可能な文明の部分をより厳密に区別し、感情的な反発を避けながら対応策を練ることが必要だということになる。⁽⁴⁴⁾

だが、文化と文明を区別して、文明のモノだけで国際交渉を進めることは難しい。そのモノは文化の泥臭い商品であり、そのうえ優れた国際競争力をもつものである。二国がそれぞれナショナリズムを克服し、グローバリズムに対応するためには、文化と文明を結びつけた統一課題で解決することが必要であり、文明だけでは解決できない問題である。しかし、日米構造協議のフォローアップの現段階で、日本の市場開放の具体策にはっきりした裏付けがみられないなどで、議事が延期し、アメリカはその都度、通商第301条の発動をひらめかすなどの動きを示している。これは、日本がまだ全体の基本価値において固有価値を維持することに囚われているからである。日本人はすぐに自分は日本人であることを発想の原点に据えており、国際化やボーダーレス化が進むなかで、日本の慣行や制度では外国人を差別化するなど、独自の固有価値を続けることを重視して、国際化が迫られている従属価値の変化に対応しようとはしない。いまこそ、日本人は国際化が迫られている従属価値の変化に積極的に対応し、固有価値を変化させ、しだいに全体の基本価値を国際化に変化させることが必要である。これは、日本人が一面日本人、多面国際人の二つの顔をもって、ココロをより広くし、かつより大きくしながら、価値の向上をはかることを意味する。

また一国と他国の相互関係のあり方は、下記の三つのパターンに分かれる。

(44) 小島 明稿「国際化と摩擦の考察」、日本経済新聞、1987年12月4日。

① オープン・システム（文明指向）

先ず他国に与えよ その結果、自国も大きく
得られる 国際展開型

② クローズド・システム（文化指向）

自国を学び、守れ その結果、自国は変わり
なく得られる 国内中心型

③ インターフェース・システム（文化・文明指向）

他国と合意するまで話し合へ その結果、両
国は仲良く共に得られる 国際均衡型

これら三つのシステムのなかで、国際化やボーダーレス化を背景に、とくに各国が指向すべきあり方はインターフェース・システムであり、それを追求することによって国際間の相互依存関係が強まり、モノやサービスを中心に国際経済均衡型の成長がはかれることになる。

エドウィン・O・ライシャワーは、日本と世界における独自性と国際性のなかで、下記のように述べている。⁽⁴⁵⁾

「今日、日本にとって最大の課題は、国際社会の完全に協力的なメンバーとなり、平和な世界の秩序の発展に指導国として寄与することです。このためには、日本がその独自性の意識を放棄することが必要でしょう。……多くの日本人がより国際的になる必要を、たとえ感情的にはまだ準備ができていないにしても、理性的には気づいております。…日本の並みはずれた経済的成功ゆえに、他の諸国に対するある程度の自己満足的な誇りや傲慢さが見られることは避けがたいとしても、日本の世界からの隔絶を強めようとする方向への動きは見られません。そうした試みは明らかに自殺的です。最も鼻もちならない自己満足に陥っている日本人でも、国際協力の増大が日本の未来の成功への唯一の希望であることは理解しています。もう一つ誰に

(45)エドウィン・O・ライシャワー、福島正光訳「ザ・ジャパニーズ・トゥデイ」、株式会社文芸春秋、1990年（Edwin O. Reishauer, The Japanese Today: Change and Continuity, 1977）。

とっても明らかなことは、豊かな日本は豊かな世界にしか存在しないということです。日本における国際化教育は現在様々な努力を行っており、日本人にもっと国際的な精神をもたせ、これまで馴染んできた国家というマユの中から国民を引っ張り出そうとしています。これらの努力は必要な程度に比べれば、まだ確かに小さな弱いものですが、すべての動きは正しい方向に進んでいます。世界情勢も否応なく日本人を外へ引き出そうとしています。

しかし、日本がもっと国際的になり、しかもその速度がもっと速まるだろうと信じられる主な要因は世代の交代です。世界の最も大きな転換の根本は世代的なものです。むかしの状況を知っていた年輩者がどうにかしぶしぶ受け入れることを、過去を実体験していない新世代のものたちは、まったく疑うことなく、しかもしばしば熱心に吸収しています。今日、戦前世代と戦後数世代の間には大きな心理的な差があります。若い世代は年長者よりもずっと国際的な精神をもっています。彼らは世界を熱心に歩き回り、自分が世界の若い動きの一部だと考え、外部世界の違いをやすやすと受け入れています。事実、彼らは外界にあるものを見たり、それに参加したり、チャンスがあるまでは、日本の中に閉じこめられているように感じています。彼らは自分の都市を世界から異なったものではなく、世界文化のセンターであると見なしています。さながらアメリカ人がニューヨークを、フランス人がパリを見るように、彼らは東京を国際都市だと見ています。若者たちが自らを他人と違ったものだと感ずるという考えこそ、忌むべき、むしろ笑うべきもののなのです。

世界的破局の発生を防ぐならば、日本人がますます独自性の意識を薄めて、世界の重要な部分となっていくことは確かです。今日の日本人をひどく悩ましている独自性と国際主義の葛藤は国際主義の勝利によって解決されるでしょう。そして、日本人の経済力と技術力がこうした傾向にはっきり寄与するようになるにつれて、日本と世界は生き生きと発展する世界秩序

に大きく近づくに違いありません。」

このように、ライシャワーが日本人に対する愛情をもって、日本人が自己の独自性を棄てて国際的な精神を発揮し、とくに若い世代を中心に、平和な世界秩序の発展に寄与する、国際化社会の形成に乗り出すことは間違いないと予想しているのは、とくに注目されることである。

3. グローバル化時代と文化・文明の共存

いまや、世界の政治、経済、社会、技術のあり方は国際化、ボーダーレス化からグローバル化へ移行し、1990年代後半から21世紀へかけてグローバリゼーションがますます大きなウェイトを占めることが予想される。しかし、経済や技術はグローバル化を指向して進歩、発展するとしても、政治や社会が民族、国益に囚われて、ナショナル化を指向し、グローバル化に歯止めをかけるかも知れない。これを文明と文化の問題に置き換えると、確かにモノや技術を中心とする文明は従属価値のあり方からグローバル化の方向をたどるかも知れないが、ココロや思想を中心とする文化は主体価値のあり方から文明のグローバル化を抑え込み、ナショナル化を推進するかも知れない。

このうち、経済の面を展望すると、P・F・ドラッカーは世界経済には三つの大きなトレンドがあり、①今後、ますます経済のグローバル化が進行する、②経済のリージョナル化（地域圏化）が大きな力となっていく、③経済のローカル化が進み、無視できない要素となる、の三つを挙げている。そして企業戦略としては、あらゆる企業、地方の中心企業でさえ、先ずグローバルに思考し、グローバルな情報を自らの意志決定のなかに組み込まなければならないが、それにもかかわらず、企業の行動はますますローカルでなければならなくなる。これは、今日、あらゆる分野においてローカルの課題、ローカルの文化、ローカルの言語の重要性がますます強調されているからである。したがって、われわれはいかにグローバルに思考し、いかにローカルに行動するかについて学ばねばならない。

(46)

次いで、技術の面を展望すると、「OPINION FOR 2000」は、テーマとして「グローバル社会の技術貢献」を取り上げ、下記のように提言している。⁽⁴⁷⁾

基調提言としては、① 21世紀の資源、環境、人口の課題にこたえられるのは科学技術だけだ、② 社会は独創の成果を的確に評価し、積極的に育てていく必要がある、③ 文化の多様性をよく理解してこそ、世界への技術貢献もうまくいく、の三つを挙げ、具体的には、④ 世界が真に求めているものでトップに立つことでしか、日本は生き残れない、⑤ 情報をフルに活用することで、最善の問題解決に到達できる時代がきつつある、⑥ 高度の技術領域で基礎研究を実用化することこそ、日本のメーカーの役割である、⑦ いい研究者は、やはり研究者として優れている先生のもとでこそよく育つ、⑧ グローバルな産学協同で、世界中の能力を活用する必要があるなど、四つを提言している。これら四つのなかで、とくに注目されるのは、④、⑧の二つである。

④では、西沢東北大学学長が、「いま、科学技術をベースにした、人類初めて以来の大変革が進行しています。その中で、日本は考え方や態度を、これまでとは大きく変えて、常に世界を視野に入れてやっていかなければならなくなっています。その際、肝心なのは、世界のトップに位置するような技術を、いつもいくつかもっていないなければいけないということです。それも、世界中の人々が本当に求めているものでなければなりません。そういうものを、低価格、高品質で供給していけば、いろいろ問題はあっても、世界中がそれを使いたがります。また、そういう方向にしか日本の生きる道はないと私は考えています。」と述べている。また⑧では西沢東北大学学長、下山オリンパス光学工業社⁽⁴⁶⁾三菱総合研究所編「21世紀型社会への構図」、ダイヤモンド社、1991年。
⁽⁴⁷⁾「OPINION FOR 2000」「グローバル社会への技術貢献」、日本経済新聞、1991年1月27日。

長の二人が、「グローバルな産学協同はこれからの課題だが、一方、グローバリゼーションを進めていくと、海外の文化との調和が課題になる。現在の人たちの精神や文化を傷つけるようなことをやりながら、いくら技術をもち込んでも、結果的にはマイナスが大きくなるでしょうね。やはり、その国、その地域の文化を傷つけない、むしろ育てるようなやり方での技術貢献の道を探らなければならないと思います。…技術のグローバリゼーションを進めていきますと、必ずローカルな文化に突き当たります。文化というのは、それぞれの国や民族で非常に微妙な違いがあります。これまでの海外経験を通じて、その多様性、多面性を痛感しており、それを無視した技術やビジネスの展開は絶対できないというのが私の信念です。」と述べている。

このように経済や技術はモノやサービスを中心に国境を越えてグローバル化が進むが、政治や社会は制度や慣行を中心に民族や国益のナショナリズムが働き、グローバル化への壁をつくる。これはグローバリズムとナショナリズムの対立、あるいは文明と文化の確執を意味する。しかし、前に述べたように、経済や技術は基本的にはグローバル化の道をたどるが、そのなかでローカルニーズやローカル文化を重視または育成することが求められ、それを指向している。これは文明の領域に属する経済や技術が、たとえば経済の平準化や技術の移転化で国境を越えるとしても、それぞれの国の文化のあり方を改めて見直し、それらに対応していく過程を示すものである。そこに経済や技術におけるグローバル化とローカル化、あるいは文明と文化の調和点が見出されるかも知れない。一方、政治や社会は基本的にはナショナル化の道をたどるが、そのなかでグローバル化への機会や脅威が与えられれば、自国の考え方を改めて、他国と虚心坦懐に話し合い、制度や慣行で若干の譲歩をはかるかも知れない。例えば、日米構造協定で、日本の姿勢は相変わらずかたくなであるが、それでも大店法の是正、独禁法の強化、流通機構の改善など前向きの対策を打ち出しているの

は、その譲歩の一端を示すものである。

このように、政治や社会においても、たとえナショナリズムの殻から脱し得ないとはいえ、経済や技術のグローバル化の変化をあくまで無視し、それを徹底的に押さえ込もうとすることはできない。もし、それが貫かれれば、その国は他の国々との交流が断絶し、国際的な孤児になってしまう。したがって、一国の政治や社会は、その根底ではグローバル化の真意を探り、すったもんだのあげく、表面ではあくまで反対の構えをするが、裏面ではその一部を受け入れようとする構えに出る。これは国際間交渉のあり方を示し、両国はたとえ不満足でも、その不十分な妥結を尊重せざるを得ない。

考え方・やり方の国際化を、日本人と他の文化の人が「一緒に考え、一緒にものごとをやる」ための工夫と定義すれば、一緒に考え、一緒になにかできるためには、両文化の間に十分共通性があるか、それが不十分でも文化の間の違いを効果的に橋渡しできるかどうか依存する。また効果的な橋渡しは両者間の違いがわかっていて、違いを乗り越える共通の目的や哲学が強く存在するとき効果的となる。橋渡しの仕方にも新しい指向が求められる。それは異なる諸文化が共生していくうえで機能的なルールを提供するような新しい考え方、新しい価値の創造であり、その意味で新しい地球文化の建設への指向である。現在の経済摩擦は深いところで文化間の違いによる文化摩擦であるといわれるが、その意味は文化間の違いによる摩擦だということであろう。しかし、現在の摩擦の原因は、文化間の違いよりも、どの文化もまだグローバル化社会のニーズにマッチした発展をしていないことにある。そこで、文化間の違いに対するメタ思考（一次元上位の思考の意）を考え、新しいグローバル文化への方向を模索することが課題になる。⁴⁴⁸

一方、これに対する別の意見もある。⁴⁴⁹

「近頃、われわれ日本人は国際人にならなければならない。日本は国際化しなければならないということがよくいわれる。しかし、国際人

になることはどういうことなのであろうか。考えてみると、この問題はそう単純でないことがわかる。そもそも国際人になる人種はどこにもいない。世界にはアメリカ人とか、中国人とか、日本人とかの様々な人間がいるだけである。また個人と個人の場合も同じである。民族と民族、国家と国家がつき合うことができるためには、なんらかの共通の価値観、ものの考え方をもっていなければならない。そのような共通の基盤を前提として初めて関係が成り立つ。価値観が異なれば関係は成り立たないのである。この点をはっきりさせておかなければならない。

お互いの価値観の違いをお互いに認識し、自分とは違った相手のものの考え方をお互いに尊重し合ってつき合っていけばよいといわれるかも知れないが、そのようなことは言うのは簡単だが、なかなかできることではない。そうするためには、両者がともに自分及び相手の価値観を相対化できなければならない。そのためには、両者がともにそれぞれの価値観を相対できる一段上の一つの共通の価値観をもたなければならない。結局、共通の価値観をもたなければならない。自分と相手とのあいだに一段上の共通の価値観を新たに築き、それに基づいて両者のそれぞれの価値観を相対化するなどということは大変なことで、これまでの歴史上、そのようなことを成し遂げた民族や国家を寡聞にしてわたしは知らない。…われわれ日本人は国際人にならなければならないと説く人は、具体的にどういうことを考えているのであろうか。まさか、日本人であることをやめて、アメリカ人になれるということではあるまい。

だとすれば、日本の価値観も、アメリカその他の諸外国の価値観も相対する一段上の新しい価値観を創り出し、それを世界に提唱しようというのであろうか。初めにいったように、これ

(48) 林 吉郎稿「考え方、やり方の国際化」(やさしい経済学)、日本経済新聞。

(49) 岸田 秀稿「国際人とは何者か」、毎日新聞、1986年10月14日。

はまだどの民族もやったことのない大変なことだが、そこまで考えた上でないと、軽々しく国際人というようなことをいうべきではないであらう。」

このように、各国が国際化やグローバル化を指向するためには、二つの国が一段上の一つの共通価値を創造して、それぞれの価値を相対化することが求められる。これはメタ思考だが、これまで例がない初めてのケースなので、その実現はきわめて難しいといえよう。例えば、世界の国々の案件を解決することを一任されている国連は、国際政治の均衡に対して、各国を越える一段上位の価値観を示すことなく、それぞれ各国の合意に基づく協調的価値観をもって対応している。二つの国が国際化をはかっていくためには、理想的なメタ思考ではなく、現実的な協調思考を打ち出し、先ず国際間の交渉でそれぞれが積極的に話し合いや協議を行うことが必要である。そのためには、それぞれが国際的な感覚や意識を身につけ、ナショナリズムを踏まえながら、前向きの姿勢で相互が受け入れられる共通価値を見出して妥決に到達するように努力しなければならない。この場合、モノを分けることはdivideであり、日本は安くて良いモノを輸出し、国際的にdivideしているが、これをココロの面に広げていくことが求められる。ココロを分け合うことはshareであり、このshareを国際的に広げていくことが求められる。⁵⁰⁾ この心構えがやがて国際間の共通価値を生み出すことは明らかであらう。

私は十年近く、名古屋近郊の大学へ通うため、常に東海道新幹線を利用しているが、二人掛けの座席でも隣のひとが声をかけることはほとんどない。逆に私は隣のひとに声をかけて交流を深くすることに努めているせいか、知らない情報が聞けて、あっという間に目的地に着いてしまう。一般に日本人は車中で知っているひと達やグループの仲間とは声を大にして交流を深めているが、あかの他人には知らんふりである。

(50) 平野絵里稿「私の多価値化ライフ」、日本経済新聞、1989年1月18日。

これに対し、私は欧米諸国の出張でフライトをなん回も利用したが、とくに隣の席の外国人は向こうから話しかけ、それに対応して大いに交流を深めることができた。これは見知らぬ国のひとに対して、欧米人がオープンであることを示すものである。日本人がクローズドであることを示すものである。いまや国際化時代といわれるのに対し、隣の席に坐っている外国人はもとより、日本人にすら声をかけないことは、その心性がきわめて自己中心的であり、ファミリーオンリーであることを示すものである。これでは、日本人が国際化への仲間入りをすることは難しいとみられる。

先般、電通総研で実施した「内なる国際化に関する調査」において、日本人が外国人に日常的に接する印象について分析を行った。それによると、結論は、今後も外国人の流入が増大するのはやむを得ないことを認めつつも、現在の文化・生活様式を崩さない範囲でなら外国人を受け入れるというものであった。このような態度が日本人全体の傾向とすれば、グローバル・フレンドシップの確立にとって、いくつかの問題を残すことになる。まずは流入する外国人を単なる労働力としてみる態度を改めねばなるまい。彼らを異なった価値観・生活様式をもっている生きた人間としてどう遇するかを真剣に考える必要がある。さらに異文化理解も必要である。外国の文化を理解できる深い教養を身につけることができれば、文化の語り合いのなかから尊敬が生まれ、友情に発展する。またある外国人への印象が外国人に共通のものか、あるいは個人的特性によるものかについて見極めるだけの理性的態度をもたねばならない。日本人間のフレンドシップでも当然意識されるはずの個人差を考えることであろう。そして、実際に流入する外国人は多国籍である。そうした多国籍人と友情を築くには、日本人に潜む「西洋崇拜意識からの脱却」が望まれる。以上のような、日本人の意識・態度改革が実現すれば、生活者レベルでのグローバル・フレンドシップの確立も可能になる。〔51〕

「OPINION FOR 2000」でグローバル・フレンドシップをテーマに、音楽家の三枝成彰は、地球文化を生きるため共通の文化がフレンドシップの原点になるとして、下記のように提言している。〔52〕

「良いテレビや自動車をつくっても決して尊敬されない。それよりも、地球の文化といえる西洋文化を西洋人と対等に語り合うこと、自分の意見で西洋文化を語ることができること、さらに日本人が西洋文化を再生する担い手になること、そういう時代がきているのではないか。」

これは日本人が共通の課題である西洋文化を自分の意見で語り合い、日本人がその再生の一役の担い手になるという点で傾聴に価する意見であろう。そこまで、日本人が腹を割って進んでいけば、グローバル・フレンドシップへの道は自ら開かれることになる。

それでは、グローバル化時代を迎えて、文化・文明の確執というよりも、文化・文明の共存という課題を取り上げてみよう。これまでの文化のあり方や文明との関わりを中心に、それは、どのように変化し、今後はどういう方向をたどるだろうか、など文化の社会学の立場から分析したものを基礎に検討してみよう。〔53〕

文化は、一定の人びとによって共有される行動様式であり、また価値体系であるが、多くの場合、文化が所在しているのは一定の地理的空間をその範囲としている。文化は空間的広がりをもち、その広がり外縁部で他の文化とぶつかり合う。これが文化接触であり、二つまたはそれ以上の文化が接触すると、対立現象や緊張関係が生まれる。これは別の表現では、相互依存関係または相互学習を意味する。文化は他の文化と接触することによって刺激を受け、その内容が変わる。一つの文化は他の文化と接触することによって、新たな文化要素を加えて、常

〔51〕堀口昇治稿「グローバル・フレンドシップへの意識改革」、日本経済新聞、1991年3月27日。

〔52〕三枝成彰稿「地球文化時代に生きるために」、日本経済新聞、1991年3月27日。

〔53〕加藤秀俊「文化の社会学」、PHP研究所、1985年。

に再生産し続ける。なぜなら、文化は他の文化からの刺激、啓発作用によってより豊かとなり、生活もより楽しくなる。これは雑種文化というよりも複合文化を形成する。日本人の生活をみると、西洋風、日本風、中国風などがあり、複合文化といわれる。

また現代の文化は、かつてないほど巨大な物質文化のセットによって組み立てられている。このように、高度に組織化され、また複雑になった文化は、アフリカやパプア・ニューギニアといったような素朴な文化と同列に並べて考えることは難しい。1950年代以降、文化をあつかう者たちは、その相違点に着目して単純社会と複雑社会といった分け方を試みている。複雑社会は人類の歴史のなかで都市が成立したときにその萌芽形態がみられ、次いで文字による情報蓄積が大きな役割を果たし、文字と都市が表裏一体をなして、新しい人間の生活様式、すなわち文化をつくり上げ、素朴社会は複雑社会へ大きく展開した。こうした都市から出発した入れ物のなかに収まった文化を、単に複雑文化と呼ぶだけではなく、文明という入れ物のなかの文化といったほうが適切である。

梅棹忠夫は「文明学の構築のために」のなかで、こうした道具、機械、建築物、道路などを、一括して人間の生活を成り立たせている装置群と見なし、人間の現実的なあり方は人間と装置で形成する一つの糸、システムであると述べているが、つまりこれは文明を指している。確かに、われわれは日本文化を構成する一員であり、文化が行動様式である以上、われわれの行動様式、思考習慣といったものは文化であるに違いない。しかし、その文化は文明という入れ物にしっかりとめ込まれている。文明というのは目に見える装置に限られたわけではなく、物質文化に対立するものとしての非物質文化のなかにも、文明的要素がきわめて濃厚になっているのが現代というものである。

文化の接触によって、ひとつの文化からいくつもの文化要素が流出し、一方、その文化を流入させた側の社会は、そうした外的刺激によっ

て文化変化を遂げてきたので、人類の歴史は文化交流の歴史であったのかも知れない。

こうした文化接触は20世紀の半ばに入ってから、質・量とも驚くべき成長を遂げた。これはひとえに現代技術が生み出した交通、通信、情報の領域での進歩の産物ともいえる。とくに交通においてはリアモーターカーや極超音速旅客機によるスピード・アップ、通信・情報においては衛星通信の拡大や世界の隅々までも結ぶ情報ネットワークの形成など、文明関連装置は機能、過程、構造を通じてより巨大化、加速化、高度化していくので、文明の変化は予想できないものとなり、そのなかに置かれている人間の価値体系としての文化に与える影響はきわめて大きいものになるだろう。

そうすると、人間の基本価値のなかで、従属価値とみられる文明はますます進歩や発展を高めて巨大価値となり、主体価値とみられる文化はとくに非物質文化に属するものが文明の影響を受けるので中小価値となり、人間の基本価値は全体として大きな変化をたどることになるだろう。これは、① 装置技術の進歩や発展が高いこと、② 文明がリード役となってイニシアチブを取ることで、③ 文化の接触による各文化のダイナミックな変化が大きくなること、などによるものである。しかし、このように果たして物質文化を代表する文明が巨大価値となり、非物質文化を代表する文化そのものが中小価値で甘んずるのであろうか。

確かに、文化は物質文化と非物質文化の二つに分かれ、物質文化は実在している物質の文化に投影された人間の外面的な意識や判断に関わる文化であるのに対し、非物質文化は目で見ることができず、手で触れることもできない、人間の内面的な精神やココロに関わる文化である。したがって、物質文化は人間の生活の外面世界における衣食住に関連する文化であり、モノの技術の影響を受けるのに対し、非物質文化は人間生活の内面世界における信仰、思想、教育などの文化であり、モノの技術の影響を受けない。例えば、ひとりの高潔な僧はひとつの信

仰を守ることに自分のすべての生活を捧げ、毎日毎晩祈りをしながら、悟りを開くことに努めている。寺は粗末で、テレビやラジオはなく、着ているものは地味で、けばけばしさはなく、食べ物は三度とも一汁一菜である。そして、悟りを開けば、信者たちを集めて教えを説いている。この僧にとっては物質文化などはいらざるものであり、その進歩の動きなどは馬耳東風であらう。

しかし、そうした僧たちが各地にいて、それぞれ信者たちに教えをたれていくならば、その影響力はきわめて大きく、全国にしだいに浸透していくことであろう。これは信仰の教えが日本人のココロを支え、それが一つの大きなかたまりとなって持続していくことを示すものである。これは物質文化の無限の進歩や発展に対して、大きな抑止力となって働くことを意味する。これから先、物質文化は技術の絶えざる進歩によって無限の発展をたどるが、そこに新しい障害や問題を提起することは明らかである。例えば、高度情報社会を迎えて、一方では物質文化としての文明が急速な進歩や発展をたどり、精神文化にも影響を与えてカルチャー・ショックをもたらすが、他方では情報の断絶、情報症候群の発生、コンピュータ犯罪の拡大、コンピュータ・ウィルスの台頭、などをもたらす。これは高度情報社会に光と影の二つが現れることを示すものである。

こうした高度情報社会の影は、物質文化としての文明があまりに速く拡大してきたために現れたものであり、それぞれに対する政策や措置が打ち出されているが、その反面、それは、これまでのモノ中心を追求した文明の結果であり、ココロ中心の文化を看過したとがめであるといえることができる。これは、物質文化の発展がいき過ぎると、必ずデメリットが現れ、それを克服するためには、もう一度精神文化の原点に戻って見直すのが必要であることを意味する。この基本的な尺度になるのは、非物質文化、すなわちココロの文化であり、高潔な僧の悟りによる教えである。この点、精神文化に慣らさ

れたひと達の目は絶えず物質文化の動向を注視し、もし物質文化にいき過ぎがあれば、それを前もって予想し、未然に抑制することが求められるわけである。

また最近、考古学では吉野が里の大掛かりな遺跡の発掘を初め、各地でそれぞれ遺跡を発掘する、文化の源泉を求める動きや、そのうえ郷土文化を見直し、それを再現する動きが活発になっており、一方、歴史学も絵画、民具、音楽、迷信、俗信などを資料として取り込む動きが目立っている。これは文明の学問が文化のなかに再び足がかりを見出そうとしていることを意味する。ここで大切なのは文化に戻るという発想を棄て、文明の立場を再認識しながら、文化のもつ歴史的特性を文明のなかに位置づけていくことであろう。⁵⁴これは文明の入れ物のなかの文化ではなく、逆に文化の入れ物のなかの文明を意味する。確かに、モノの文明は無限に拡大し、ココロの文化はその影響を受けて縮小していくが、その過程でココロの文化は見直され、権威を回復し、そしてモノの文明を規制することになる。これは、比喩的にいえば、「孫悟空が如意棒をもって、自分のもののように天地を高々と飛びまわったが、しだいに大きな空間を堂々めぐりして、遂にへたばってしまった。それは孫悟空が釈迦の手のなかにいて管理されていたからである。」ということを指している。

また論理学でいうように、内包としてのココロの文化が深まれば深まるほど、外延としてのモノの文明は広がり、また逆に外延としてのモノの文明が広がれば広がるほど、内包としてのココロの文化は深まるといえよう。このように、文化と文明は、相互作用の関係にあって、それぞれダイナミックな変化を示しながら持続的な調和が保たれているといえよう。したがって、人間の基本価値は、文化と文明の相互作用の変化と調和の関係を見極めながらシステムの調整し、それによって価値の向上がはかれるわけである。これからは、モノの時代よりもココロの時代であるといわれる。モノはより巨大にな

⁵⁴阿部謹也稿「文明と、文化と」(視点)、毎日新聞。

るが、ココロはそれを受け入れるほど巨大になろう。それによって、文化と文明の調和が引き続き保たれ、文化の充実と文明の発展の相互展開がはかられることになろう。このため、90年

代後半ないし21世紀に国際化やグローバル化の時代を迎えても、文化と文明の共存は可能であり、それによって平和への世界秩序は限りなく維持されるだろうと考えられる。